

小説を書くことについて

書くことは頭の整理に役立つ。特に、自分の思っていることを他人に伝えるには、理屈や論理性を含めてわかりやすくしなければならないと思っている。小説を書いてみることも、自分の表現力を磨くのに良いと思っていた。しかも、小説は人間の喜怒哀楽を刺激する世界であり、自在に書けるようになれば面白いだろうと思った。

だが、自分は小説を書く側の世界を目指すには不向きであることがわかってきた。

「言いたいことを直接書いてはいけない」「良い話にするためのウソは許容される」「縦書きでなければならない」「自分の想像力不足」——私が感じたことについて、書いてみたい。

1. 「言いたいことを直接書いてはいけない」

自分の言いたいことを文字にしないと相手に伝わらないと思うのだが、プロの意見は違う。

テーマというのは読者が内容を読むことで感じ、気づくべきことで、書き手が読者に先回りして言葉で説明してしまうのは、小説ではご法度なのです。

・・・

そうではなく、作品を読むうちに「ああ、人の死に方ってその人そのものなのかもしれないなあ」、「生まれ方にもその人自身が表れるのかもしれないなあ」と読者が自然に気づくような書き方を工夫したいものです。

——「[実践]小説教室」 根元昌夫

リストラされた中高年、がんばって働いているのに出世しないと嘆く女性社員、低賃金にあえぐフリーター、こういった人たちが、自分が体験した理不尽な現実を小説に書いて、世間に訴えたいという、その気持ちはわからないわけではないのだが、ちょっと待っていただきたい。

読者はお金を払って楽しみたいのだ。

言いたいことはあるだろうが、それをいきなり主張してはいけない。自分の言いたいことを、ぐっとこらえて、わざと道化ぶったりして読者にサービスするのが、プロの作家だ。

——「プロを目指す文章術」 三田誠広

2. 「良い話にするためのウソは許容される」

嘘をついてはいけないと子供に教える一方で、小説なら嘘を書いても良いと大人に教える。これでは、自分の中で、嘘に関する一貫性を保つのが難しくなるのではないか。

私は書き手の女性に、「事実を利用しながらちょっとだけ嘘を書いてみては」と提案しました。その嘘とは、幼稚園から帰ってきたら、「祖母」がその朝亡くなっていたという知らせが届いたというものです。

——「[実践]小説教室」 根元昌夫

まずは日記に嘘を書く。他人に見せるために美化してもよい。

小説家志望者が、毎日文章を書き続ける訓練として、最も入りやすいのが日記である。

ただ、経験した事実を、正直に書いてはいけない。他人に見せる意識がないと、文体と文章が甘くなる。

・・・

日本経済新聞によく掲載されている、「私の履歴書」なども同様である。発表するために書かれているので、みな、自分については化粧をしている。嘘がうまくなればなるほど、小説を書くためのトレーニングになるのである。

——「60歳で小説家になる」 森村誠一

コラムやエッセイにはウソを書いてもいいんですか？ という質問をなさる方がいます。これへの答えは、「自分が書きたいことを書くのではなくて、人が読みたいことを書く」というモットーにつけていますが、あえて申しませう。もちろん、そんなことはあなたの自由です。必要ならウソもつけてください、作り話もしてください。読者からすれば、つまらない本当の話より、面白いウソ話を読むほうがずっとしあわせです。

そういうと、「でも、私は本当のことしか書けません」と、胸を張っておっしゃる方がありますが……。そもそも、本当のことってなんですか？ たとえば私は、自分で「顔がいい」と思っております（笑）。同じく私は、自分のことを、「引込み思案と口下手のせいで、損ばかりしている人間だ」とも感じている。私にとってはどちらも「本当のこと」ですが、周囲の人間は、きっと「本当のことではない」と断言

するでしょう。

このように、人間は、「私」についてさえなにが本当かを知りません。ましてその「私」が見ただけのこと、聞いただけのことを、どうして本当のことといえるのか……。

こうなると哲学の領域の話ですが、このテーマは文学・ジャーナリズムの世界でもすでにさんざん議論されています。「ファクト（事実）とはなにか」「ノンフィクションとはなにか」といった一連の評論をご覧ください。

本当だと思ってウソを書く自由があるのですから、ウソだと思ってウソを書く自由もあります。ただ「私は大金持ちだ」というウソを書けば、人がたかりにきますし、「私には盗癖がある」というウソを書けば、人が寄りつかなくなる。それだけです。

——「読ませる技術」 山口文憲

3. 「縦書きでなければならない」

小説の募集要項では、原稿用紙・縦書きと規定しているところがほとんどのものである。小説の内容は自由に書けるのに、縦書きを指定される不思議さがある。

さらに、「ワープロの出力でも良いが、原稿用紙と同じフォーマットにしろ」と書いてあった。どうして、そんな理不尽なことを要求するのだろうか？ 縦書きに限る、と書いてある規定も多く、びっくりした。

縦書きに限る？ 青天の霹靂である。なにしろ、ワープロの画面は横書きだ。プリントアウトも当然ながら横書き。僕は文字を縦書きで出力したことはない。手書きでも縦に文字を並べたことはない。唯一の例外は、結婚式や葬式の受付で自分の名前や住所を書くとき。縦書きを強いられるのは、あのときだけである。研究室にある書物はすべて横書き、書類もすべて横書き、ノートもなにもかも、すべて横書きである。気がつくと、僕が読んでいる月刊雑誌も例外なく横書きだったから、小説以外では縦書きの文字を読むこともない。小説だけが縦書きなのは、「まあ、そういう古典的な文化なのだな」と思っていたけれど、原稿にまでそれを要求するのは何故なのか？

——「小説家という職業」 森博嗣

また、ヨコ組に関しては、さらに強い反対があった。「日本語はタテに書くことになっている。そういう決まりだ。ヨコ組なんかにしたら誰も読んでくれない」というのである。しかし、そうだろうか？ PCや携帯の画面を見れば、HPもブログもみなヨコ組だし、学校の教科書も国語を除いてほとんどはヨコ組。新聞、雑誌、本だけがタテ組を守っているだけで、読者の日常を考えればヨコ組が圧倒的に主流になっているのではないだろうか。

「バカなことを言うものではない。それは、ネットの世界だけの話だろう」と、ある重役はあきれた顔をしたが、「そうは言っても同じ漢字を使う中国でさえ、新聞も雑誌もヨコ組ですよ」と言うと答えに窮してしまった。

——「出版大崩壊 電子書籍の罠」 山田順

4. 「自分の想像力不足」

せっかく小説を書くのなら、面白いものを書きたい。しかし、自分の想像力では、新しいものを創ることはおろか、世に起こる現実さえ描写できないだろうと思った。

小説は、家庭用品などの実用品ではない。人間の感性を売りものにした芸術的な商品であり、歴史的に見ても特殊な存在である（この種の商品は数百年の歴史しかない）。便利さや使いやすさ、あるいはそれらの性能向上が売れるベクトルではない。では、何を目指して作るのか？ それは大変難しい問題だけれど、あえて一言でいうならば、「新しさ」である。

今までにないもの、珍しいもの、そういうものを消費者は無意識に求めている。また、整ったもの、安心して消費できるものは、既に「名作」として膨大な数のストックが揃っていることも念頭に置かねばならない。「さらに生産する理由」がどこにあるのか、を生産者は常に考える必要があるだろう。

——「小説家という職業」 森博嗣

秋なかばのその日、東京都国立市の閑静な住宅街は、どこか異様な雰囲気包まれた。

その出来事は、町内の住民には何か事件が起こったらしいという具合に伝わっただけだったが、ご近隣の人びとは否応なくその真相を知ることになった。その家の隣近所の主婦たちは、自分たちのいつものエリアのなかで起きていた一軒の家の異常を知った。それは、あたかも、日常の世界が突然割れて、そこだけ異界

が出現し、地獄図と化したような有り様だった。

・・・(1992年に起きた「国立の主婦殺し」事件。ここから先は、凄惨な描写が出てくるので引用省略。凡庸な自分には、どんなに想像力を働かせてもこんなインパクトのあることを書けないと感じた。)

——「死刑と正義」 森 炎

以上から、自分は小説を書くことに向いていないと思うに至った。

さらに、小説家の適性について、以下のような記載が追い打ちをかける。

人生第二期をサラリーマンとして大過なく過ごし、おめでとうございました、長い間ご苦労様でしたと労われ、自身も、いい会社に入っていい人生を送れました、たいへん満足ですと答えられる人間は、小説家には向いていない。

大過なく満足してリタイアした人は悠々自適、晴耕雨読、奥さん孝行をして、旅行に出かけたり、庭の朝顔をいじって余生を送るのであろう。それもよい。しかし、小説家になる人間は、個人差はあっても、サラリーマン時代に、「なんで自分がこんなことをしなければいけないのか」という問題意識、哲学的疑問を抱えている。

——「60歳で小説家になる」 森村誠一

こうして一つ結論が出た。

不向きな小説家を目指すなかれ。